

ニュースレター

No.27

News Letter

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

松田和憲先生にきく 一般学生への「キリスト教」教育

関東学院大学では、一般学生に「キリスト教」を教える授業が開講されています。この授業の様子を松田和憲教授に伺いました。

編集部(以下H): 先生が工学部で担当されているキリスト教の概要を教えてください。

松田教授(以下M): 春学期はキリスト教Ⅰ(聖書)として、今は、山上の説教(マタイ福音書5~7章)を中心に、その今日的意味などを話しています。テキスト¹⁾も使いますが、聖書本文に触れさせるようにしています。聖書そのものも持っている深い考え方を学生に提供し、考えるきっかけになってくれればと思っています。

秋学期はキリスト教Ⅱ(倫理)で、いのち、環境、職業倫理、技術者倫理について、聖書の立場から話をしています。

H: 学生たちは、関心を示していますか。

M: 6~7割は良く聞いてくれています。何年か後にも声をかけるようにしているのですが、何かは覚えているんですよ。「誰かに右の頬を打たれたら…」とかね。

H: 先生は牧師もされています。また、昨年に宣教を論じた著作を出版されています。²⁾信徒の方へお話しすることはご専門と思いますが、一般の学生を教えるうえで難しい点はおありでしょうか。

M: 基本的に私の宣教論の視点は、文化横断型というか、クロッシング、クロスカルチャーということです。どんなに高邁な考え方で、相手に受け止められなかったら、対話は成立しません。キリスト教真理が普遍的な真理であるならば、教会の中だけではなく、人類全体にコミットできる内容を持っているのではないかと信じています。

そのときに語るのは、やはりダイアログですね。教会でも大学でも、語る内容とかは違いますが、クロッシングとか対話とか、そういう方法論ではそう違いはありません。

学生だからアバウトなものにするとかではなく、聖書が人類に語っているメッセージはこれなんだと学生に感じ取ってもらう場を提供し、どう受け取っていくかは、少し時間が掛かるかもしれないけれども、それぞれの学生に委ねています。

1) ワークブック「よくわかるキリスト教入門Ⅰ,Ⅱ」関東学院大学出版会(2004, 2005)

2) 現代日本の「宣教の神学」研究、関東学院大学出版会(2010)

(文責: 編集部 武田俊哉)



Column 「捜真女学校長 坂田祐」

客員研究員 小玉敏子

1919年三春台に創立された中学関東学院の初代院長坂田祐は、1927年関東学院が東京学院と合併して、財団法人関東学院が組織されたときに、高等学部長兼中学部長となる。そして、1932年12月、さらに捜真女学校長を兼任する。昭和初年、不況のため財政的に困難になったうえ、日本の宣教は農村に主力をおくことになったので、アメリカのミッション本部は捜真女学校を閉鎖することにした。廃校決定の悲報を伝え聞いた同窓生は敢然として立ち上がり、その打開策に奔走する。高垣勳次郎校長は責任を一身に引き受けて退職し、この難局を背負って立つ後任校長は容易に見つからなかった。この急場を救う道として、理事長である坂田祐が校長を引き受け、学校を存続させる。2, 3年のつもりで引き受けた坂田は、諸般の事情から、あしかけ15年も校長を務めた。「捜真女学校長としての坂田祐」について考えたいと思い、「坂田祐研究プロジェクト」に加えていただいた。

「見えてくる バプテストの歴史」刊行に際して

バプテスト研究プロジェクト代表 村 椿 真 理

バプテスト史またはバプテスト神学教育のための日本語による教材は、これまであまり存在しなかった。本学名誉教授の高野進氏や元文学部教授の大島良雄氏、また日本バプテスト連盟の齋藤剛毅氏や本学の森島牧人学院長など先達による近代バプテストの研究書、また幾人かの若手研究者の手によるバプテスト研究論文は数多く執筆され、また大西晴樹氏や浜林正夫氏、金丸英子氏などによる海外の諸研究も訳書として紹介されてきたのだが、本書のような包括的な「バプテスト史」といえるようなものは近年まったく存在しなかったのである。そこでこれまで、日本のバプテスト学徒は、バプテスト史に関しては、すべて洋書を用い、その研究を進めなければならなかった。

日本で、高等教育機関まで設立したキリスト教私学の中で、自らの教派史研究によって、その特色を十分に内外に提示してこなかった学校に、わたしたちの関東学院も含まれていたような気がしてならない。バプテスト教会は、横浜バプテスト神学校を設立し、一般教育事業にも力を入れてきたのであるから、明治期に来日した宣教師や神学教師たちは、バプテストの歴史や神学を教えるため、実際幾つもの基礎的良書を翻訳したり、著作活動も他派に劣らず盛んに行なってきた。その後、日本人で神学教師になった人々も、みな留学し、日本のバプテスト教育のため、様々な著作活動を行ない、確かに種々貢献してきた事実があった。しかし、特に第二次世界大戦後、バプテストの神学教育、教派史教育は他の伝統に立つ諸キリスト教主義学校と比べると、はるかに遅れてきてしまった。戦前戦後の合同教会参加問題や、そこからの再度離脱問題に集中せざるをえなかった経緯も影響していたし、一九七〇年代の学園紛争時、本学神学部が廃部の憂目に遭った出来事などが最大の原因として推測される。もともと本学にも神学部開設以来、R・P・ジエニングス教授、R・E・フロップ教授や、B・L・ヒンチマン元学院長など、優れたバプテスト歴史家や教育者がおられたことを忘れることはできない。

こうした問題の分析はともあれ、多くの日本のバプテストたちは、バプテストの歴史を余り詳しく学ぶ機会をもたないままに、今に至った可能性がある。バプテスト主義にみられる様々なバプテストの神学は、そのひとつひとつが歴史の中で生まれ、積み重ねられ、それが継承されてはじめて伝統と呼べるものとなったのであり、その意味で歴史を学ばずしては、個々の神学的主張も正しく理解することはできなかつた。そうしたことから、この度、このような信頼できるバプテスト史が刊行出来たということは、遅ればせながらではあるが、意義ある一歩ではなかつたかと考える次第である。

本書の特筆すべき特色は、その監修者を初め、執筆者の幅の広さにあると言える。五人の執筆者は、日本バプテスト同盟と、日本バプテスト連盟に分かれており、教派を越えた共同作業によって本書は生まれた。第一章「宗教改革」は、日本バプテスト同盟の松岡正樹氏が担当し、第二章「バプテスト教会の誕生と十七世紀バプテスト教会の発達」は、日本バプテスト連盟のバプテスト研究者、齋藤剛毅氏がその執筆を担当された。第三章の「近代イングランドのバプテスト教会」は、本学の村椿が執筆し、第四章の「アメリカのバプテスト教会」は連盟、西南学院大学の金丸英子氏が執筆して下さった。そして第五章の「日本のバプテスト教会」も、また連盟に属する研究者、枝光泉氏がその執筆を担当されている。共にバプテストの歴史・神学を研究する者が志しを一つに集まり、これを編纂したのである。そしてこれらの執筆者は、敢

えて日本の宗教改革研究の第一人者であられる出村彰氏に本書の監修をお願いした。教派的に偏った歴史解釈を避け、また教会史的な広い見地からも、本書を見ていただき、誤りのないバプテスト史を著すために、出村先生のご指導を仰いだのである。出村彰先生には二年間にわたり、各執筆者の原稿を何度も丁寧にチェックしていただき、相互に学び合いつつ、厳しくも楽しい時間を費やして、企画のはじめから数えると四年がかりで、ついに脱稿へと至った。

このように、本プロジェクトでは、学術的に高い水準の歴史書を発表することを第一の課題としたが、さらにこれを伝道者養成の実用書として有効に使えるように、またバプテスト系諸大学の「自校史」の学びの教材としても用いられるように、「まだキリスト教の歴史を十分に学んだことのないような学生にも理解できる教科書とする」というコンセプトを掲げ、内容を吟味しつつ執筆された。読みにくい漢字にはルビまでふり、各章の巻末には、トピックスなる頁を設け、用語・人名の解説、バプテストの主張、または読者への問いかけなどが記されており、章ごとに略年表がある他、学生たちが参照できる文献表、本書巻末には人名索引なども用意され、写真や図版も可能な限り取り入れた。

これまで、バプテスト史といえば、十七世紀初期バプテスト教会の起源程度しか学ばれることがなかつたのであるが、本書ではすでに紹介したように、十八世紀、十九世紀のイングランドバプテストの主要な出来事、またこれまでほとんど手がつけられることのなかつたアメリカのバプテスト通史も、順を追って現代に至る迄、詳細に記されている。日本のバプテスト史も全体をダイジェストし、正しい歴史認識を得られように執筆されている。全体としてバプテスト教会の大きな流れを、正しく把握することが出来るように編纂されている。

本学の伝統を育んだバプテスト教会の歴史書である故に、本学の伝統を改めて学ぶためにも、一人でも多くの方々に、手にとつてご一読下さることをお勧め申し上げたい。また本研究所が、こうした歴史書の出版を通して、さらに日本のバプテスト研究の一拠点とされていくことを心から願ってやまないものである。尚、目下の情報によれば、本書はこの春から、二つのバプテスト伝道者養成機関で、すなわち、西南学院大学神学部と、日本バプテスト神学校とにおいて、バプテスト史の教科書として採用される他、本学法学部のキリスト教の講義でも、九月から教科書に指定され、用いられることが内定している。



The space of the Member

奉仕・ボランティア教育研究

奉仕・ボランティア教育研究グループ代表

細谷 早里

「奉仕・ボランティア」は関東学院の校訓である「人になれ、奉仕せよ」に最も直接的につながるものではないでしょうか。奉仕・ボランティア教育研究会では、関東学院大学の存在の意義と使命を理解し、それを実践できることを目標として研究会を行っています。この研究会では学院とゆかりのある人々の思想を研究することによって関東学院大学の建学の精神を理解しようと試み、そして、過去、現在のその具体的な実践を研究し、さらに奉仕・ボランティア教育研究の一環として、奉仕・ボランティア観とその実践についてのアンケート調査を行いました。

調査では、学校教育の一環として半ば強制的に始めたボランティア活動でさえも、実践し継続することで多くの生徒・学生が有意義な経験だったと考え、さらにこれからも機会があれば行いたいと答えています。

大学という教育機関に勤務する私たちは、これからを担う若者たちが自分を見つめ、自分を知り、自分が存在する意味を考える機会を提供し、社会の一員として貢献できることを実体験によって感じ取る機会を与える義務があるのではと感じます。昨今の社会が「無縁社会」で、「コミュニケーション能力不足」の若者が多いと言われることがありますが、自分に自信を持ってない若者が、傷つくのを恐れるあまりに他者との関わりを断つこともあるようです。日本には「滅私奉公」という考え方がありますが、自分を知り、自分を生かす奉仕・ボランティアのあり方があってもいいのではないのでしょうか。自らが行動を起こして社会と関わることで他者とのつながりを築き、自分が社会の一員であると感じ取れる機会を与えられればと考えます。

この研究会では、奉仕・ボランティア活動の推奨だけにとどまらず、学生がその活動体験を客観的に分析して日頃の学習と有機的に結びつけ、地域・国際社会の問題の根本的な解決に貢献できることを期待して学術的な研究を行っていきたいと考えています。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話：045-786-7873(研究所直通 月～金曜 10:00～16:00まで)

FAX：045-786-7806(研究所直通 24時間受付)

発行者：村椿 真理

Director: Makoto Muratsubaki